別記様式第５号（第 15 条関係、第 23 条関係）

論文審査の結果の要旨

報告番号	博（経）甲第　33　号	氏　名	富永　ちはる
学位審査委員	主査　宍倉　学　印		
	副査　三輪加奈　印		
	副査　林　徹　印		

題名：

機能不全家族に対するソーシャル・サポートーテキストマイニングによる事例研究－

論文審査の結果の要旨

本論文は、カウンセリング事例の中から家庭環境に問題を抱えた事例を抽出し、新たな環境に適応するためのソーシャル・サポートのあり方を考察している。本論文は以下７つの章から構成されている。

第１章　序論
第２章　先行研究の概観および問題
第３章　Case1：家族との心の距離を抱えた女子学生への支援
第４章　Case2：対人関係に悩む女子学生のコミュニティを支援
第５章　Case3：家族再生、うつ病克服、それに社会復帰を願う男性
第６章　青年期から成人期におけるソーシャル・サポートのあり方
第７章　結論

第１章は、本論文の問題意識・研究目的・研究方法をまとめている。

第２章は、中核となる３つの概念（「機能不全家族」、「ソーシャル・サポート」及び「ワーク・エンゲイジメント」）を整理するとともに、各概念の関係を明らかにしている。

第３章から第５章では、３つの機能不全家族の事例を取り上げ、カウンセリングから得られたデータ（相談記録、インタビュー、メール等）にテキストマイニングを適用する一方で、伝統的な心理分析の結果との比較を通じて同手法の有効性を例証している。また、分析を通じてソーシャル・サポートと相互扶助の風土醸成の重要性を明らかにしている。

第６章は、青年期から成人期への移行期のソーシャル・サポートのあり方について、特に「質」の向上を実装する観点から考察を行っている。

第７章は、結論の要約、研究の意義、残された課題のまとめとなっている。

本論文の「博士学位論文の審査基準」の独創性、新規性、貢献度、論証可能性、論文の完成度についての評価は以下の通りである。

1　独創性および新規性

従来の研究は「機能不全」に陥っている親子関係問題の修復を目指してきたのに対して、本論文では対象者が問題と共存しながら自分らしく生きることを重視し、そのために必要なソーシャル・サポートの「質」の向上に必要な問題を分析している点に新規性がある。また、インタビュー等から得られたデータにテキストマイニングの手法を応用して対象者個人の心理を可視化することによって、伝統的な心理分析を補完できる可能性を示している点に独創性が認められる。

2　貢献度

学生支援の経験に基づき、対象者が自分らしく生きるために不可欠なソーシャル・サポートの在り方を提示している点が本論文の大きな特徴である。特に、実際のカウンセリング事例に基づきテキストマイニングにその活路を見出している点では現実的・実践的な貢献が認められる。

3　論証可能性

伝統的な心理分析では、結果の解釈など評価者の判断に依存せざるを得ない点があり、評価結果には客観性を欠く部分がある。これに対して、本論文では、カウンセリングにおける発言データをもとに、テキストマイニングを通じて、伝統的な心理分析の評価結果に対する根拠を提示している。またテキストデータがあれば再現が可能な形で実施可能な方法を提示しているという点で論証可能性が担保されている。

4　完成度

ソーシャル・サポートの「質」を確保するためのツールとして「テキストマイニング」活用の有効性を示しているものの、結果の解釈に関しては、あくまで公認心理師である筆者の心理分析評価と突合せることでのみ、その妥当性を判断しているに過ぎない。この意味で「テキストマイニング」から得られる解釈の妥当性などについて、恣意性が残されており、評価結果の頑健性には更なる検証が必要と考える。また、第2章の先行研究で示された「機能不全家族」などの諸概念と、3章から5章で示された各事例との関係も十分に検討されているわけではない。このような点で、本論文には依然として改善余地が残っているものの、学位論文として大きな瑕疵があるとまでは言えない。加えて予備審査の際に指摘された点には適切かつ真摯な対応がなされており、論文の完成度は学位論文として水準は満たしていると考えられる。

以上の評価により、本学位審査委員会は、本論文が学位審査基準を満たすものと判断し、全員一致で博士（経営学）の学位に値するものと判断した。